

歴史系博物館における絵図資料の活用

—「絵図で楽しむ茨木」展を事例に—

高橋 伸拓*

要 旨

本稿は、歴史系博物館における絵図資料の活用について、平成28年度に茨木市立文化財資料館で行った「絵図で楽しむ茨木—江戸時代の村を巡る」展を事例に検討を行った。展示や関連事業を行った結果を踏まえ、絵図活用の今後の課題として、①絵図と現代の地図・航空写真との比較、②絵図の資料的検討—資料批判・年代比定・作製者、③古文書パズル・絵図パズルの改良を提示した。

キーワード

絵図 古文書 ミニコーナー 絵図パズル 古文書パズル

1. はじめに

本稿は、歴史系博物館^(註1)における絵図資料の活用について、茨木市立文化財資料館(以下、文化財資料館とする)で行ったテーマ展を事例として検討するものである。

絵図は、郡や村など一定の地域における民家や山野、河川、寺院等を絵画的に描いた地図で、山の境界や水利の確認、土地の状況把握等、さまざまな目的のもとに作られたものであり、地域の情報を読み解くことができる。そのため、全国各地で絵図を使った展示が行われ、自治体史に収録され、また学会でも特集が組まれる^(註2)など、社会的にも関心の高いものとなっている。近年では、デジタル化が進み、インターネット上で公開されているものもある。

絵図は、地域の情報を多く含んだ、貴重な歴史資料で、地域に密着した歴史系博物館では普及活動に欠かせないものであることから、その活用方法を今後も模索していく必要がある。また、筆者は、地域博物館の魅力を伝える一つの素材として、絵図資料を活用してみたいと考えている。

そこで、本稿では、2016年10月8日(土)から12月12日(月)まで実施した、第33回茨木市立文化財資料館テーマ展「絵図で楽しむ茨木—江戸時代の村を巡る—」を事例に、どのように絵図の魅力を伝え、活用しようとしたのか、そして、展示とその他関連事業を行う中で出てきた課題を

整理する。なお、本稿では、活用は展示に限らず、講座などの学芸業務も含めて論じる

2. 「絵図で楽しむ茨木」展の内容

展示の企画は、2015年10月頃に絵図展を行うことを仮に決定し、準備を開始したのは年度明けの2016年4月からで、展示する資料の選定から進めた。文化財資料館で保管している文書群については、前稿に記したが^(註3)、現在のところ2万5000件程度の古文書がある。この中には、下書きや写しなども含めて多数の絵図資料があり、中でも資料の状態の良いもの、興味深い内容を含んだものを選んでいった。

展示の趣旨は、京都と大阪のベッドタウンとして発展する茨木市では平野部で宅地が増えていき、その様子を大きく変え、また山間部も新名神高速道路や安威川ダムの建設によって変わってきており、変貌する以前の市域の様子を伝えることを目的に実施した。

展示の準備は、筆者が担当する古文書教室講座で、絵図で取り上げる村の古文書を解説し、郷土史教室講座で、展示で取り上げる絵図を用いて内容を組んだりしながら絵図と関連事項の検討を進めていった。こうした展示資料の選定と絵図の検討と並行して、展示スペースと展示の内容を固めていった。このようにして準備を進め、2016年10

*茨木市立文化財資料館

月8日から展示を開始した。

それでは次に、展示の内容を見てみたい。展示は、茨木市内を山間部、平野部、町場の3つにエリア分けして、それぞれに絵図を配置することとした。茨木市は北部が山間部で、南部が平野部という地理的特徴がある。絵図資料を選定していった結果、平野部で絵図が多く作られていたという特徴が見出だされ、平野部のコーナーを最も広くスペースをとった。

コーナーは、①「摂津国太田郡から島下郡へ」、②「山間部の村」、③「平野部の村」、④「用水と村」、⑤「町場の展開」の5つを設定し、平野部の絵図は多数あり、特に多くあった用水に関する絵図で1つのコーナーを立てた。各コーナーに展示した資料は【表1】の通りである。

まず、「ごあいさつ」で展示の目的を示した。「ごあいさつ」のパネルでは、絵図とは何かを説明し、近年、絵図が各地で展示されるなど注目されている点に触れ、茨木市域を描いた多数の絵図を使って、山間部の村、平野部の村、町場それぞれのエリアを巡ってみることを述べた。「ごあいさつ」のパネルの次に、「絵図の見方と江戸時代の村」「茨木市域の近世村位置図」のパネルを掲示し、絵図を見るポイントや江戸時代の村を説明し、市域の村の位置を確認して展示を見る上での前提となる点を確認した。

コーナー①は、まず市域全体を俯瞰することを目的に国絵図を使用した。パネルでは、茨木市域はかつての摂津国島下郡に所属し、戦国期から近世初期は太田郡と郡名が変わって、以降は島下郡に名称が戻った点や、「慶長十

【表1】「絵図で楽しむ茨木—江戸時代の村を巡る—」展 展示資料一覧

No.	資料名	年代	所属・所蔵	寸法
1	慶長十年摂津国絵図(写真)	慶長10年(1605年)	西宮市立郷土資料館蔵	229 cm × 249 cm
2	元禄国絵図(摂津国)(写真)	元禄15年(1702年)	国立公文書館蔵	274 cm × 246 cm
3	摂州太田郡粟生村名寄	文禄4年(1595年)	池上家文書 1-7	
4	摂州島下郡村々高帳	元禄3年(1690年)	北川家文書	
5	勝尾寺・粟生村・萱野村立会山絵図(写真)	元禄2年(1689年)	笹川家文書 161	348 cm × 260 cm
6	五ヶ庄組色分惣絵図	(近世)	石田家文書	32 cm × 45 cm
7	粟生村絵図	(近世)	池上家文書 1-73	66.5 cm × 96 cm
8	太田村絵図	弘化4年(1847年)	北川家文書	81.3 cm × 77.5 cm
9	山陵図(写真)	文久期(1861~64年)	国立公文書館蔵	45.7 cm × 46.7 cm
10	宗門御改帳(太田村)	文化元年(1804年)	太田村の内上野文書 8	
11	総持寺境内図	承応元年(1652年)	総持寺蔵	109.5 cm × 94.8 cm
12	水尾村絵図	(近世)	水尾区有文書 6-30	57 cm × 62 cm
13	島村絵図	文化14年(1817年)	島区有文書 775	40.5 cm × 27.5 cm
14	野々宮村絵図	天明7年(1787年)	野々宮村文書 109	98 cm × 67 cm
15	摂津国島上・島下郡悪水落川違御願	(近世)	高島家文書 5	82 cm × 84 cm
16	茨木川筋上野村領井路・用水樋絵図	宝暦7年(1652年)	奥野家文書 22-3	40 cm × 55 cm
17	茨木川筋用水絵図	文化8年(1811年)	奥野家文書 22-8	28 cm × 40 cm
18	上野村領茨木川筋・用水絵図	文政10年(1827年)	奥野家文書 22-9	30 cm × 43 cm
19	(往来橋修復のため浄瑠璃会人形興行開催につき案内)	(近世)	奥野家文書 47-3	
20	三穂積・倍賀新池築立絵図	文政11年(1828年)	奈良村文書 4	131 cm × 98.5 cm
21	松沢池絵図	(近世)	岡村家文書 19	63.5 cm × 44 cm
22	新溜池字松沢池一件帳	文政12年(1829年)	下穂積村文書 31	
23	用水論立会絵図	享和元年(1801年)	奥野家文書 26-1	213 cm × 183 cm
24	安威川筋図(写真)	文化14年(1817年)	奈良村文書 3	211 cm × 113 cm
25	五社井堰図	(近世)	北川家文書	31 cm × 46.5 cm
26	山崎通分間延絵図(写真)	文化3年(1806年)	東京国立博物館蔵	60 cm × 240 cm
27	先触	安政3年(1856年)	福山家文書 58	
28	茨木村絵図	天保14年(1843年)	茨木神社蔵	116 cm × 189 cm
29	茨木村五人組帳	天保14年(1843年)	萩谷家文書 1	
30	摂津名所図会	寛政年間(1789-1801年)	個人蔵	

年撰津国絵図」ではまだ村が整備されている段階で、現在は確認できない地名がみられる点、「元禄国絵図(撰津国)」では村名がほぼ現在の字名に近いものとなり、茨木町や郡山町といった町場があらわれている点を解説した。

コーナー②は、市域北部の山間部の村々を概観した。パネルでは、山間部の村々は山林資源を頻繁に利用し、山野は現在よりも人々の生活に密接に関わるものであった点を解説した。

コーナー③は、市域南部の平野部の村々を概観した。パネルでは、平野部は多くの村が相給村落(一村を複数の領主が治める村)で、領地が入り組んでいたことが特徴である点、米や菜種などを栽培して農業が盛んであった点、寺社参詣など文化的交流の場であった点、多数の古墳があり、用水などで利用されていた点、政治・経済・文化の面で、さまざまな交流のある土地であった点を解説した。

コーナー④は、平野部の村で作製された用水に関する絵図を取り上げて、用水の整備や争論について概観した。パネルでは、農業が盛んであった平野部は多くの水を必要としたことから用水の確保や、悪水(排水)の処理が課題としてあった点、こうした水利に関する絵図が多数残されていることから、水利が生活に関わる重要な問題であった点を解説した。

コーナー⑤は、茨木市域の町場を取り上げた。パネルでは、江戸時代の茨木市域には、町場として在郷町の茨木村と西国街道の郡山宿があった点、茨木村はかつて茨木城を中心に成立した城下町であったが、元和元年(1615)の一国一城令によって同城は廃城となり、その後茨木村は在郷町として発展した点、郡山宿は西国街道沿いにできた宿場町で、大名が参勤交代で通行して本陣や旅籠を利用した点、江戸時代には茨木村が流通の拠点、郡山宿が交通の要所であった点を解説した。

次に、絵図を展示するにあたって注意・工夫した点を確認する。絵図は、山や川、道、田畑などが着色されており、古文書に比べて視覚的に見映えのする資料ではあるが、絵図を見るだけではその内容や価値を理解できない。そこで解説を要するが、キャプションではあまり説明しすぎないようにし、適当な分量になるように作成した。

加えて、絵図に描かれている村が、市域のどの場所に当たったのかを確認できるように、「江戸時代の茨木市域の村」というパネルを各絵図に配置し、場所が分かるようにした

ところ、アンケートでは好評であった。

【表1】No.25の五社井堰図は、安威川に造られた村が取水するための堰を描いたもので、立体絵本のような絵図になっており、堰がどのような仕組みになっているか分かるようになっている。そこで、この絵図のレプリカを作製して触れることができるようにし、触れる絵図を用意した。

この展示では、図録も作成し、展示した絵図のほぼ全てを収録した。図録では、はじめに茨木市域の近世村位置図を掲載し、掲載している絵図に付けた通し番号を図に落として、それぞれの絵図がどの場所を描いているかを示した。これによって、絵図が描いている場所を一覧できるようにした。また、巻末には絵図に記された文面を解説し、翻刻史料として掲載した。

このように、展示と図録から江戸時代の茨木市域の村々を巡ることができるように工夫を行った。

3. 「絵図で楽しむ茨木」展の関連事業

「絵図で楽しむ茨木」展では、関連事業として①特別講演会・学芸員講座、②茨木市立中央図書館での展示と講演、③関連ウォーク「村絵図を持って旧村を歩く」という絵図の普及活動を行った。絵図資料と古文書の魅力をいかに伝えるか、市民にいかに興味を持ってもらえるようにするか、さまざまな試みを行った。以下、順番に内容や成果、課題についてみていきたい。

①特別講演会は、村田路人氏「江戸時代の村と用水―茨木市域平野部の絵図を手がかりに―」(2016年10月22日)、藤田和敏氏「国絵図から読み解く村のかたち」(同年11月13日)、南出眞助氏「茨木城下町の形成と近世在郷町への変容」(同年12月10日)という内容で、山間部・平野部・町場の各エリアの特徴などを講演していただいた。学芸員講座は、筆者が「茨木市域の絵図の種類と特徴」として、絵図に残されている絵図の特徴とその作成過程、作者の絵師(絵図師)について解説した。各講座には、文化財資料館で日頃行っている古文書教室講座や郷土史教室講座への参加者以外の方も多数参加されていた。

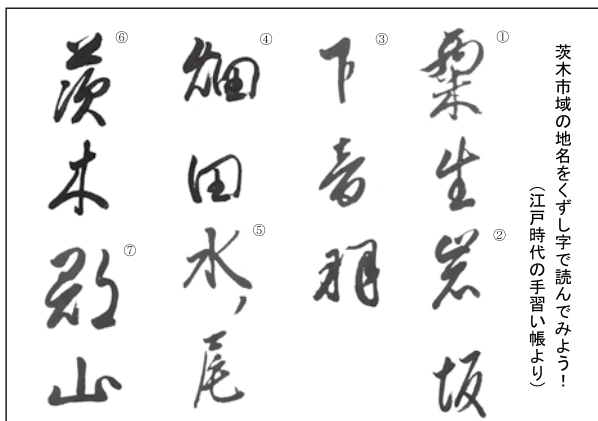
特別講演会では、山間部・平野部・町場の各エリアの特徴や絵図の内容を示していただき、学芸員講座では、市域に残る絵図資料の特徴を示して、参加者が熱心に質問されている様子を見ると、絵図や江戸時代の茨木市域への関心が高まり、普及活動に一定の成果があったものと

思われる。

②茨木市立中央図書館での展示と講演は、2016年10月25日(火)～11月6日(日)に「絵図で楽しもう!江戸時代の茨木」と題して、テーマ展の「摂津国太田郡から島下郡へ」「山間部の村」「平野部の村」「用水と村」「町場の展開」の展示パネルを用いて、絵図の写真を変えて展示を行った。また、10月29日(土)に展示と同名のタイトルで講演を行った。講演では、市民に興味を持ってもらえるような絵図をピックアップすることにし、【表1】No.5・8・9・12・15・20・21・23・28の絵図を取り上げて、解説した。まず導入として、絵図とは何かを説明し、次に絵図に書かれている字がくずし字であることから、「茨木市域の地名をくずし字で読んでみよう!」という、地名のくずし字をコピーしたプリント(【資料1】、原史料は安政5年「手習帳」池上家文書6-464、茨木市立文化財資料館)を配布してくずし字に慣れてもらう試みを行った。講演は、文化財資料館に普段来られている方だけではなく、小学生や若い年齢の方の参加も見られた。

講演では、絵図が示す興味深い点をできるだけ端的に示すようにした。例えば、【表1】No.15は茨木川の安威川への付け替えと安威川を淀川に繋げる計画が描かれたもので「河川整備の大計画」とし、【表1】No.23は取水している川や池と、取水先の田に○や∞などの記号が書かれており、「絵図に書かれた謎の記号」といった見出しを付けて気を引き、一般の人にも分かりやすいように、絵図でポイントとなる点のみを紹介した。講演には82名の参加者があり、アンケートの結果をみると概ね好評であった。

展示は規模の小さいものではあったが、中央図書館の利用者は多く、講演にも多くの参加者があり、市民に絵図の存在を知っていただくことができたものと思われる。



資料1 くずし字解読体験のプリント

③関連ウォーク「村絵図を持って旧村を歩く」は、毎年行っている西国街道リレーウォークで茨木村絵図(茨木神社蔵)を持って、実際に旧村落内を歩くという試みであった。このイベントでは、茨木村絵図を和紙に印刷をすることで、雰囲気作りをした。茨木村絵図に描かれている町場の旧道を辿りながら、駒寄や卯建、格子窓を備えている江戸時代からの旧家を見て、江戸時代に在郷町としてあった茨木村の様子を思い浮かべたり、梅林寺や茨木神社など寺社の位置が江戸時代から変化していないことを確認していった。ただ、当日は雨天であったため、十分に説明ができず、雨で絵図が濡れてしまうなどの問題があり、雨天時の対応が課題として残ったが、今後も改良して行えればと思う。

4. ミニコーナーの設置と効果

今回のテーマ展では、展示とあわせてミニコーナーを設置した。ミニコーナーでは、寄贈していただいた駕籠(太田家資料)を置いたり、畳を敷くなどして江戸時代の雰囲気作りをし、ここに古文書パズルを設置した。古文書パズルについては、前稿でも触れた鹿毛敏夫氏・高橋修氏の研究(註4)を踏まえて作製を試みた。

絵図に関する展示ということもあり、古文書パズルに使用する素材は、茨木市域の地名をくずし字で記した江戸時代の手習帳(前掲、安政5年「手習帳」)を使用することにした。これは市民に馴染みを持ってもらい、少しでも古文書に興味を持ってもらうことができるものと考えて用いることにした。

また、古文書パズルと別に、絵図パズルを作製した。絵図パズルの素材は、市の中心部の市街地を描いた「茨木村絵図」(茨木神社蔵)を用いることにした。古文書パズル・絵図パズルともに、素材はすぐに決まったが、作成にあたってクリアにできなかった問題として、古文書や絵図をパズルの図柄に用いるだけでなく、ある程度の学習効果を盛り込む点である。古文書パズルを解くことで、古文書の解読体験ができる。また、絵図パズルを解くことで、絵図の見方が分かる、といったような学習効果である。この点、展示直前まで館内の他の職員とも話し合ったが、解読体験をするようなパズルにすると難易度が上がり、小学校低学年くらいを対象とすると難しい内容となるなど適当な内容とするのが困難であった。結果として時間的な問題もあり、古



写真1 テーマ展ミニコーナー



写真2 古文書パズル

文書パズル・絵図パズルともに素材の資料は図柄として用いることとした。

このコーナーの景品として、絵図シールを用意した。古文書パズルは、初級・中級・上級・博士の4種類を用意し、パズルを組み上げると景品が手に入るという内容にした。景品は職員の手作りで作製し、初級は「摂津名所図会」の茨木神社の図（シール①）、中級は「用水論絵図」（奥野家文書・シール②）、上級は「茨木村絵図」（茨木神社蔵・シール③）でそれぞれシールを作り、博士は2種類のしおり（茨木村絵図くしおり①・茨木神社の図くしおり②）を用意した。ミニコーナーは展示初日の10月8日から開始し、12月8日までに数度、増刷して最終的にシール①が125枚、シール②が121枚、シール③が121枚、しおり①が73枚、しおり②が74枚を作製した。

茨木村絵図の図柄の絵図パズルは、テーマ展の展示室の入口付近に設置し、このパズルを組み上げると、古文書のコピーを貼った扇面型のしおりを手に入れることができるようにした。しおりは最終的に253枚を印刷し、古文書パズル・絵図パズルともに多くの方に参加していただいた。

パズルの参加者を見ると、幼児・小学生から保護者まで楽しんでいただき、保護者の方はくずし字に興味を持っていた様子がうかがえた。アンケートでは、家族で楽しめるもので良かったなどという意見をいただき、好評であった。

5. おわりに

以上、「絵図で楽しむ茨木」展を事例に、絵図資料の活用方法を述べてきた。最後に、本展示と関連事業を踏まえて、絵図活用の今後の課題を整理しておきたい。

①絵図と現代の地図・航空写真との比較

絵図は、着色されており、視覚的に見映えのする資料であるが、文字がくずし字で書かれているなどして、何が描かれているのか読み取るのが難しい。アンケートでも指摘されたが、絵図と、現代の地図・航空写真とを並べて出すことで、土地利用の変化や絵図の精確さをより鮮明に示すことができたものと思われる。絵図のデジタルデータ化を進めて、絵図と現代の地図・航空写真をデジタルデータで並べて表示するような工夫が求められる。デジタルデータ化を進めて、スペースの問題で展示の難しい大型絵図の閲覧・活用にも応用できればと思う。

②絵図の資料的検討—資料批判・年代比定・作製者

今回は時間的制約もあり、絵図の資料批判や年代比定、作製者について十分に検討できなかったことが課題として残った。地域に残された絵図の年代確定は、重要な論点であると思われる^(註5)。【表1】No.15の絵図は、年欠であるが、茨木川の安威川への付け替えと安威川を淀川に繋げる計画を描いたものである。作製年代や作者は不明であり、「御願」と記されているが、誰がどこに宛てて出した（出そうとした）のかという基本的なことがほとんど分かっていない。市民にとって大変関心のある内容であり、展示期間中にこの絵図について何度か質問を受けた。地域の水利、また現在にまでつながる河川と用水の問題を考える上で重要な絵図であるため、今後も資料批判・年代比定を行っていく必要がある。この絵図以外にも作製年代の不明なものが多くあり、いつの時点を描いたものであるかを確定させていき、資料としての価値を高めて、活用していく必要がある。

また、筆者が行った学芸員講座で触れたが、絵図の作製者である絵師（絵図師）については検討が進んでいない。絵師（絵図師）の名前が確認できた絵図は、【表1】No.5・

23のみであるが、絵図をどのような人が作っていたのか、村に住む絵師はいかにして生活をしていたのかという点は一般の人も関心を引く課題である。以上のような作業を通じて、各絵図の性格を位置付けていきたい。

③古文書パズル・絵図パズルの改良

古文書パズルは、今回は市内の多くの地名が出てくる絵図展であったため、地名のくずし字を図柄としたことで、展示と連動することができたものとする。幸いにも当館では、市内の地名をくずし字で記した資料があったため作製しやすかったが、他の場所でも地名を書き上げた古文書を用いれば作製が可能である。古文書パズル・絵図パズルともに

好評ではあったものの、今回はくずし字をパズルの図柄とし、くずし字の形からパズルを組み上げる形式にできなかった。くずし字を学習するという点では、まだパズルの学習効果について検討の余地が残された。一般の方に、いかにして古文書・絵図に興味・関心を持ってもらうか、その第一歩として古文書パズル・絵図パズルを改良していければと思う。

上記の課題はすでに指摘されてきたものもあると思われるが、茨木市域には今回取り上げた絵図だけではなく、まだ多数の絵図が確認でき、上記の課題を意識しながら今後も絵図資料の活用を検討していきたい。

【註】

- 1) 本稿で博物館とは、博物館法に規定された登録博物館・博物館相当施設、及び博物館類似施設(地域資料館等)を指す。
- 2) 『歴史学研究』No.841・842(歴史学研究会、2008年6月・7月)で「特集 世界のなかの近世絵図(Ⅰ)(Ⅱ)」が生まれ、文献史学にとどまらず、さまざまな分野から、絵図資料が検討されている。この中の磯永和貴「地域史のなかの絵図—自治体史の絵図・地図編—」(『歴史学研究』No.841)で自治体史の動向を知ることができる。
- 3) 高橋伸拓「歴史系博物館における古文書の活用—茨木市立文化財資料館の事例—」(『Musa(博物館学芸員課程年報)』30号、追手門学院大学博物館研究室、2016年3月)。
- 4) 鹿毛敏夫「子どもと向き合う史料館活動—古文書解読と体験発掘の実践—」(『博物館研究』410号、2002年7月)、高橋修「小学生向け古文書読解プログラム開発の意義と効果」(『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』17号、2013年3月)、高橋修「小学生だから読める古文書講座」事業の実践—新しい博物館教育論と資料論の構築を目指して—(『神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報 LINK』6、2014年12月)。
- 5) 絵図の資料批判・年代比定については、鳴海邦匡『近世日本の地図と測量—村と「廻り検地」—』(九州大学出版会、2007年)、木塚久仁子「絵図を描いた人—土屋篤直と「土浦道中絵図」」(『月刊地図中心』420号、財団法人日本地図センター、2007年9月)、磯永和貴・鳴海邦匡「近世村絵図の史料学(一)—大阪商業大学商業史博物館蔵「河内国茨田郡藤田村文書」の村絵図を通して—」(『大阪商業大学商業史博物館紀要』10号、2009年8月)などですすでに指摘があり、検討されている。

【付記】

「絵図で楽しむ茨木」展ミニコーナーの古文書パズル・絵図パズルや景品のシール・しおりの作製は、文化財資料館の桑野梓・山田なつこ・長野茉莉子・中澤和子の各氏に、絵図の写真撮影や五社井堰図のレプリカの作製は、同館の中東正之氏の協力を得た。また、特別講演会の講師をお引き受けいただいた先生方、中央図書館の職員の皆様には大変お世話になった。本稿はこうした皆様のご協力の成果であり、末筆ながら記してお礼申し上げる。